

『ねお展—であり続けてきた地域のこれまで そして これから』 誌面座談会

登壇者：森島 勝博（岐阜博物館長）、伊村 靖子（国立新美術館情報資料室長）

中原 淳（一般社団法人よだか総合研究所代表理事）、金山 智子（IAMAS）

2022年10月14日（金）

岐阜県博物館館長室

Photo：山田智子

博物館法の改正と「ねお展」

金山 最初に「ねお展」をご覧いただいた印象や、感じられたものについて伺いしたいと思います。まず、館長からお願いします。

森島勝博（館長） 今回、岐阜県本巣市にある「根尾」をテーマにした展覧会「ねお展」を私どもの岐阜県博物館のマイミュージアムギャラリーで開催していただきました。マイミュージアムギャラリーは開館して以来ずっと、一般の方が自由に想いを展示していただけるスペースとして活用していただいています。和傘や虎画、漫画やアニメのコレクションなど、県民の方であれば誰でも自由に使っていただけます。今回の「ねお展」でちょうど通算200回目となりますが、過去には一般の方の創作活動や一般の方のコレクション展示がほとんどでした。昨年度、高等学校による展示がありましたが、今回はじめてマイミュージアムギャラリーに大学院大学に登場していただきました。また、岐阜県博物館ができて46年になりますけれども、地域そのものをテーマとして展覧会を行ったこともほぼありませんでした。全く新しい試みでした。

ちょうどいま、2022年の4月に博物館法が約70年ぶりに改正され²、2023年の4月から施行されます。今回新たに博物館のミッションとして、デジタルアーカイブ化が法律に明記され、博物館は収集している資料をデジタル化していくことがひとつの業務として加えられました。それから、この法改正によって「地域の多様な主体との連携・協力による文化観光、まちづくりその他の活

動を図り地域の活力の向上に取り組むこと」が博物館の事業として位置づけられ、博物館にとって大きな転換点となったと言われています。もちろん、教育機関としてこれまでやってきたことは継続しつつ、地域との関わりも模索していくということですし、これまでも地域との取り組みはありましたが、いよいよ法律改正になって、明確に位置づけられてきました。そういうタイミングで、この「ねお展」を博物館にお迎えできたというのは非常にタイムリーというか、時期的に我々にとっても大変参考になると思います。

金山智子（金山） 有難うございます。私たちも鑑賞者からのフィードバックはとても気になります。展示会場にいる教員同士、「こんな人がいらした」、「こんな話があった」など逐一報告しあっています。「うちの近くの地域にもこういうものがあるんだよ」と話す人もいれば、展示している内容から「根尾に行ってみたい」、「訪れて





みたい」と興味をもってくださる方がいたり。根尾を知る知らないに関わらず、様々な感想をもってもらえるのは、なかなか面白いです。

いま、館長にお話しいただいたように、博物館法が70年ぶりに改正される転換期に、たまたまですが「ねお展」ができたことは、私たちにとってもよかったと思います。今後、この展示のようなものではなくても、地域をもっと深くみていくとか、違う目線でみていくことがやれるといいと私たちも感じています。次に、今日初めて展示をご覧になった伊村先生はいかがでしょうか？

伊村靖子（伊村） まず、博物館という幅広い年代を扱う機関において、「現代」をどのように扱うことができるのかという点に興味があります。もうひとつ、県立の施設において県の一地域を扱うことが実はチャレンジングな点ではないかと思いました。それがなぜ成立するのかと考えた時に、森島館長がおっしゃった「マイミュージアムギャラリー」という市民ギャラリーで、そのなかの一企画としてIAMASが担当するという座組みが素晴らしいと思いました。

博物館法の改正の方針転換のひとつに、文化財の観光資源化が盛り込まれ、議論を呼んでいます。その観点でも大学が県の一地域の現在を取り上げることがどのように機能するのかが一考の余地があると思います。私自身、昨年度まで大学に所属し、現在は美術館に勤務するという両方の立場を経験している時に、一番恐れていることは、両方の権威的な機能が相補的に作用してしまうことが観客を置き去りにしてしまう可能性があるのではないかということです。そういうやや批判的な観点に立

登壇者プロフィール

森島勝博（岐阜県博物館長）

1987年東京大学卒。岐阜県職員となり、米国ニューヨーク駐在員、都市公園課長、観光国際局副局長などを経て、2022年より現職。

伊村靖子（国立新美術館情報資料室長／主任研究員）

情報科学芸術大学大学院 [IAMAS] 准教授を経て、2022年より現職。2013年京都市立芸術大学博士号（芸術学）取得。研究テーマは「1960年代の美術批評——東野芳明の言説を中心に」（博士学位論文）。近年は、美術とデザインの関係史に関心を持つ。共編に『虚像の時代 東野芳明美術批評選』（河出書房新社、2013年）。論文に「『色彩と空間』展から大阪万博まで——60年代美術と建築の接地面」（『現代思想』48巻3号、2020年3月）、展覧会に「国立新美術館所蔵資料に見る1970年代の美術——Do it! わたしの日常が美術になる」（2022年10－11月）など。

中原淳（一般社団法人よだか総合研究所 代表理事）

山ね不動産店主、本巣市まわる市民協働運営チーム代表。宅地建物取引士、賃貸不動産経営管理士。まちづくりや自治に関するデザイン活動を行う。NTTインターコミュニケーション・センター（ICC）研究員などを経て現職。京都大学農学部、情報科学芸術大学院大学（IAMAS）卒。受賞等2020年グッドデザイン賞「地域・コミュニティづくり」分野、2006年アジアデジタルアート大賞優秀賞、2004年情報処理推進機構 未踏ソフトウェア採択、2003年日経サイエンス ビジュアル・サイエンス・フェスタ優秀賞

金山智子（IAMAS 教授／CRRプロジェクト代表）

ちながら、「ねお展」を実際に拝見して、作品と資料を横断的に展示する枠組みが機能していると思いました。

今回の展示の特徴のひとつに、IAMASは研究機関という立場に関わりながらも、展示資料にあまり講釈をつけずに展示をしています。私は以前、同様の展示をIAMAS内部の展示施設で観た時に、資料を扱う立場について説明がほしいと感じました。しかし今回一市民という立場でIAMASが博物館の展示に参加し、作品や資料という分類を問わずにすべての文脈を等価に見せることの意味が見えてきたように思いました。つまり、博物



館が歴史を扱う時に「周縁」とみなしてきたような資料も一緒に並べる思い切った展示から、普段は声にならない人々の声や口承のようなものに面白さを感じました。

もうひとつは、この展示に対して関係者の方からどういう反応があるのかと金山先生にお聞きした時に、根尾在住の方が「キラキラしている、この場所が」とおっしゃったとか。

金山 中原さんの知り合いの人が言っておりました(笑)。

伊村 展示されることによって、特別な場所になって嬉しいってということもあるかもしれないですし、自分がよく知っている場所が遠くに行ってしまったような複雑さかもしれないですし、あるいは根尾ではなくほかの地域がそういうふうに使われるべきかもしれないとか、おそらく当事者であればあるがゆえの、色々な評価が含まれているはずで、額面通りに受け取るだけだと本当の感想を逃してしまうようにも思いました。

金山先生に最初にお聞きしたのは、「今回の展示は全部持ち込んだものですか。この博物館の所蔵資料を使っていますか」ということでした。今回はIAMASで調査した資料を展示しているということでしたが、今後もしこちらで所蔵されているような歴史資料と合わせて見る機会があったら、ぜひ見てみたいと思いました。歴史資料として一般化される資料のあり方と、身近な文脈に置き直される資料のあり方で全く違う印象を与えて、とても面白いんじゃないかという感想をもちました。

金山 たくさん大事な点を上げていただいて、短い時間にこれだけ考えていただけてありがたいです。博物館で展示するからこそ色々制約があること、逆に本当はもっと色々な可能性があったんじゃないかということ、どちらの気づきもやってみなければ分からなかったというのも正直なところですよ。伊村さんがおっしゃったようにIAMASからの持ち込みだけではなく、博物館に所蔵されているものとのつながりを考えることや、博物館を活かしたIAMAS内ではできない展示の可能性がすごくあるということは、最近ようやく考えられるようになりました。その辺りもこの後に話していけたらいいと思います。

では次に、今回一緒に展示もしている、よだか総合研究所の中原さんはいかがでしょうか。

問われる地域らしさ

中原 淳(中原) 前提として、私は根尾に住んでいます。子どももいて、そこで子どもは育っています。今後、移動しない前提で、「根尾に位置付けられた人間」としてこの展覧会に参加しています。そういうわけで、いままでほかの展覧会を企画した時とは全然違う感じがします。今回「アジール」という概念を金山先生と相談して決めた時も、本当にそれでいいのかは全くわからなくて、一番怖かったかもしれません。自分と関係ないものにタイトルをつけるのとは全然違うんです。めちゃくちゃ怖いです。

なんでそう思うかっていうと、自分を「移動しない人間」だと認めて、周りの人に接すると、同じように「移動しない人」として生きている人たちがいるわけです。だから、その人たちに対して、住んでいる地域をあるカテゴリーのなかで代弁することが恐ろしい。近所の人や子どもの友達の家族、地域の友人に展示を見てもらって、やっぱりいろんな感想があるんです。ごく月並みなことですけど、根尾をひとつの総体として捉えるなんてことはかなり難しい。鑑賞者が展示に何かしら根尾らしさを感じることはあると思いますが、そもそもひとつの総体としての根尾はあり得ないんだと思いました。

もうひとつ思ったことは、根尾という地域のなかでも郷土史をやられている方や地域文化の研究をされている方がいるんですが、それらと、この「ねお展」はよくも

悪くもかなりズレています。郷土史の人たちが注目するのは、城址や武将とかですね。その場合、根尾自体ではなく根尾と武将との関係や、武将自体に主眼を置いていることが多いわけです。

それから、ズレ方を端的に表していたのは、「ねお展」で淡墨桜へのフォーカスがほぼないことでしょう。これは、私が出展者や企画者として意図したことはありません。しかし、地域を観光的に見る場合とか、行政的に見る場合は、まず100%中心に淡墨桜が出てきます。それを見せないように展示企画が進んでいったのは、後で気がついてものすごく不思議でしたね。

金山 そうなんですよ。企画側としては薄墨桜を意図して外したわけではありませんでした。そこに全く目がいかなかった。あっ、いってないというのは嘘ですが。根尾が1500年前からあるという根拠のひとつに淡墨桜がよく引き合いにだされますけど、それを展示に入れることは、たぶん誰も考えなかった。

中原 誰も考えませんでしたね。でも観光行政とか、シティプロモーションからすると異様でしょう。

伊村 まさにそこは、今後の博物館法の改正によって、地域を観光拠点にするという話だったら問われますね。

金山 逆に言うと、根尾といったらイコール淡墨桜というくらい、淡墨桜はみんな知っているし、それを目的に多くの人が観光に来るんです。でも、私たちからみると、根尾の良さは薄墨桜じゃないって、どうしてだか、そう感じていったんです。学生も淡墨桜でお花見をしているので淡墨桜を知らないわけではないんです。でも、それは単にそういう場であって、取り立てて自分たちが語るべきことではないというか、フォーカスしたいと感覚的にならなかったというのが正直なところですよ。武将についても、地元の年配の方で歴史好きな人たちのなかにはそういう方はいるんですけど、私たちがフィールドワークに入っていくって目にしたのはそこではなかったという感じが圧倒的に強かった。

中原 そうそう。そのアプローチや視点の置き方が全然

違うんだなっていうことがよく分かって、だからこそその違いについてちょっと考えるようになりました。

歴史記述と地域の多声性

金山 「ねお展」という名前をつける時に、根尾という地名の漢字をつける案もあったんですけど、あえてそれを平仮名にしました。自分たちの「ねお」がこの地域の漢字の根尾とはイコールではないというか。そこには脚色や偏った見方も含めて入ってくるっていう、そう意図がありました。でも「アジュール」というタイトルをつけるのが怖いというのは私も全く一緒に、そもそも裏の文章を書いたのは私なので、これ色々いわれたらどうしようかなってかなりドキドキしました。博物館のスタッフからも文章に書いたことについて、「これは本当ですか？」と、ところどころ聞かれるたびに、事実確認しました。博物館的な資料がないとなると、「ならば、自分たちの調査を通してはこう見えたっていうふうに書いたらどうですか」「自分たちのフィールドワークを通してこういうふうに見えてきたという程度にしてもいいんじゃないですか」とも提案されました。ただそれはあまりしなくなかったというか、エクスキュースみたいな言い回しは、研究レベルではいいけれど、展示をするなら腹をくくろうかなと私は思っていました。それをするなら全部書き換えたいという思いがあり、何かあったら責任取るとくらいの覚悟で出したというのはあります。ただ内心は結構ドキドキで、絶対地元の人から何かいわれるだろうなって（笑）。美術展とかでもありますよね？

伊村 博物館は歴史記述をするパブリックな場所という性格をもつので、そこは皆さん慎重になられたんじゃないでしょうか。先ほど中原さんが言われたように、当事者として根尾を示すことの難しさと同時に、博物館や大学という立場の方が当事者よりも上位に来てしまう事態も十分に起きかねず、歴史記述というものがもっている限界を露呈しているように思いました。為政者の価値観で歴史を記述することの限界が見えてきている現在、文字による記述に代わる手段として「ものから考える」ことのできる展示の重要性が現れてきているように思います。見るという行為においては、誰もが同じ立場にあるという前提がもう一度、博物館から見直されてもいいの

ではないでしょうか。

世界的なパンデミックで、わざわざ美術館や博物館を訪ねる必要性や、ほかの人と一緒に鑑賞する経験の正当性を述べる必要性が私自身も直面している問題です。ひとつに歴史の複数性を担保しながら、ものを見ることから先入観をどう外していけるのかが問われるべきで、市民のための場所と銘打ったところで、誰が関わっても良いことが保証されることに意味があるのではないのでしょうか。

金山 タイトルだけではなく、何が選ばれて記述されているのか、どんな風に書かれるのかということは、地元の人にとっては一番関心があるところだと思います。展示物の製作中に中原さんなどにおかしな個所がないか内容を確認してもらいましたが、歴史的史実として確認が取れない箇所については博物館から問い合わせがあり、最終的に削除したところやニュアンスを変えたところがありました。展示を見てもらったらわかってもらえるかもしれないと思ったところは展示として残し、意図的に説明を補足しました。博物館的にできるかできないかではなく、何をいわんとしたか、何を元にそういわんとしたかっていうことを、ものを見ることを通して、お互いに共有できた気はしてはいるんです。ものを一緒にみることは、「ここにこういうふうに書かれていて、こういうのは私的には大事だと思うんです」というこちら側の考えと、「こういうものだから、ここには置けないね」という博物館側の立場が、そのプロセスのなかで付け合わせできる機会はある意味珍しかったかもしれません。

中原 これを読んでいただける方、皆さんに言うまでもないことだと思うんですけど、一応ちゃんと言語化したと思うんです。さっき伊村さんが言った歴史記述の問題のなかに多声性があってほしいと思います。

私はよだか総合研究所のローカルシンクタンク業務のなかで、歴史に書かれる内容によって、公共の予算配分やその後の政策が本当に変わることを目の当たりにしています。だからこそ、「ねお展」がマイミュージアムギャラリーという場所で地元民とのコ・クリエーションとして始まり、地元の人たちの裁量の余地がある程度担保される形で記述や展示ができたことは、一般の人が思っ

ている以上に幸運なことだと言いたいです。こういう機会がなかったら、書かれた記述を「こうでしょ」って見せられて、「だから、こういう風な予算配分してこうするよ。これでいいよね」って言われて終わりです。こうした状況は「位置付けられた人間」にとっては厳しいですが、そもそもこういうメカニズムがあることさえなかなか知られていません。博物館の制度が変わったことで、「ねお展」が実現できたのかもしれないと思うと制度変更が嬉しいなと思う反面、いわゆる武将や権力者についての展示をバンバン繰り返す事態の引き金にもなるかもしれない。両方あり得るのでちょっと怖いなと思います。

伊村 住民にとっては、有難いという可能性もあるので、すごく悩ましいですね。地域のブランディングによって救われる人もいる一方、なかなか声にしづらいことをどのように取り上げていくのかっていうことが大事ですね。

中原 そうなんですよ、本当に。

ねお展の特殊性

金山 淡墨桜は別として、例えば、全体で30くらいある集落のなかでも注目されやすい集落があります。特に西北の方の、人が住んでいないけど、通いで存続している集落は関心がもたれやすく、メディアにも取り上げられます。でもそれをブランドにしていいいのかといたら、それは違うだろうなと。特定の場所やステレオタイプをフォーカスするのは逆の活動として今回の展示を位置付けたい。地元の人たちが自分たちの地域をどうやって他者が見ているかという関心に対して、こんな見方もあるということを示したい。地元を好きか嫌いかは別として、地域への意識をもう少しもってもらう機会も必要なんじゃないかと。売れるから、自分の地域をこうするということじゃなくて、自分の地域って思っているよりずっと面白いんだとか、そんなふうには思っていなかったけど、そのことは実は大事だったんだとか。そういうことが、根尾だけではなく、どこの地域でも感じてもらうことができれば、今後「ねお展」以外にも「〇〇地域展」とかどんどんできたら、岐阜って面白いところだね、みたいになるのではと思います。



「ねお展」の入口からみた展示

「ねお展」をやってみて、色々な手法で展開できる可能性に気づきました。「ねお展」ではいわゆるIAMAS的なものではなく、地元の人たちが作ったものを重視し展示したのですが、それができたのは、やはり博物館のおかげだったと思っています。素晴らしい作品やアーティストの作品も、地元の人が作ったものもある意味、等価にみせられるというのは、実は博物館でなければできないことです。館長はこの辺り、どうお考えでしょうか？

館長 これまでも大学と共催で展覧会を開催してきましたが、博物館が地域と関係をもつことを一層意識すると、裾野の広げ方も考える必要があると思います。また、地域をテーマに展覧会を構成する際には、地域ブランディングや観光資源に寄与する側面以外にも博物館が地域と関わり、価値を還元していく方法があると思います。

たとえば根尾は1500年にわたって時代の変化に対応しながら、地域の慣習、祭り、文化を伝承しながら営みを続けてこれているとのこと。そのしなやかな強さに今回の展覧会で着目されているんじゃないかなと思いました。今回のように、観光としては取り上げにくいものや、そこに住んでいる人が書いた記録を展示することで、

時代を超えて継続している力や魅力を見せることがほかの地域でもできれば、それはその展覧会としてすごくよいことだと思うし、そういう場に博物館になることがこれから大事になってくると思います。

金山 中原さんが空き家の不動産業を営むなかで感じていることを、「もしかしたらあったかもしれない」という物語として、つまりフィクションとノンフィクションの境目くらいの形で展示することは、一般的には博物館では難しいんじゃないかと思うんです。でも今回はそうしたものを展示できたので実はすごいことだったのかなと。現代についての展示は、利害関係者が存在しているからなかなか難しいところもありますが、それをあえて博物館でやる意義はあると感じています。

伊村 「ねお展」をみた後、常設展示と企画展示を拝見し、改めて興味深かったのは古代からの一般的な歴史展示と、地域の考古学研究で発掘された出土品の企画展、ふたつの関係性です。

もう一度博物館という枠組みに立ち返って、「ねお展」の特殊性を考えると、いわゆる普遍的な立場を取らないことが明確に見えてきます。場合によっては当事者でも



なく、外から見た視点で再発見した個人的な視点もふんだんに取り入れている。現代という利那的なものを捉えた個人的な視点が、もしきちんと伝わるのであれば、逆に常設展示とか企画展示のあり方も並行して理解してもらえるのではないかと。そういう枠組みになると、一般として扱われている「歴史」を改めて考えるきっかけも含まれ、より効果的ではないかなと思いました。

金山 今回ある集落の年配の住民が書いた記録をあえて出しています。それを書いた本人さえ「自分に間違いもあるかもしれない」と仰っていたので、それを歴史資料と位置付けるのは博物館的には難しいと考えはしました。今回はこの資料を含め、個人的なものを多く展示しましたが、公的な資料は博物館に既にあるので、むしろ博物館的なものを避け、そこにはないもの、現地でしか見つけることができなかったものを展示しようという意図がありました。そういった意図が「ねお展」に見え隠れしていると思います。

館長 基本的に博物館の展示となる対象は、たとえば歴史系だと、評価の確立したものです。また、もうひとつ、抽象的な概念を提示することもあります。たとえば当館で昨年開催した「今日から防災！過去を知り未来へ備えよう」（2021/10/8～2021/12/12）という展覧会では、防災をテーマに噴火や地震など災害の起きる仕組みを科学的に解説したものや過去の災害の記録資料から、防災グッズや避難所まで、防災意識を喚起することをねらって企画しました。これから博物館が新しい領域に進んでいくとすると、このようなコンセプト展の可能性も広

がってくるかもしれません。「ねお展」を地域をテーマにした展示として捉えると、そもそも当館は岐阜県にこだわった展示をしています。たとえば岐阜県とは何かということを展覧会で表現する時に、「ねお展」の取り組みはとても参考になりそうです。

この展覧会はいま、会期のちょうど折り返し地点です。我々が感じることに加えて、県民の方からのフィードバックも非常に興味深く、これからの博物館の展覧会を考えていく上で大きく示唆を与えるものになるだろうと期待しております。

展示によるコミュニケーション

金山 どんなふうに今回の展示が鑑賞されているのかという点は私たちも気になるのですが、フィクションもノンフィクションもあり、いろいろなものがごちゃまぜに混在しているが故に、来場者はここに展示されているものと博物館の所蔵品を区別できているのか、あるいは出展者が全部作ったり集めたりしたものとして認識しているのか、私には判断が付きません。展示室で観察しているとそれなりに結構じっくりみて、何か気になったものを長いことみている方が多いような気はしていますが、どこまで読み解いてくれているかは、アンケートなどから探っていくしかないと思っています。来場者にとって何かひとつでも気になるものがあったんだとするならば、結果として良かったのかなと私は思いますが、中原さんはいかがですか。

中原 地元の人の感想に関しては、「これが根尾だと思う」とか、「これはちょっと違うと思う」といった感想をもらうのですが、なんかもっと、「あなたも出せばいいのに」と。常々思っているのは、「お前は根尾をどう思うの？」っていうことです。“お前ヒストリー”をそれぞれが語り始めればよいのにつて。語られずに、お前が語れと。でも、それができる人とできない人がいます。僕は自分の展示を見てもらいたいというより、会話がしたいし、コミュニケーションをしたいです。そんなに期待しているわけじゃないけど、それはちょっとずつしか効果がないというか、すごく難しいなと思います。

僕の展示は、めちゃくちゃ大したことはないですし、僕以外の根尾からの出展者も「すごいものを出している」っ



ねお展の展示物「越卒のところさん」と「刃境不動産とほほ日記」

という感覚はあんまりないと思います。圧倒的な作品のクオリティで観客を停止させるみたいなのではないんです。むしろ、他者の展示によって自分で物語る歴史記述が止まってしまうので、それを避けようと思ってやっています。

伊村 お話を聞いて、国立新美術館で開催中の「国立新美術館所蔵資料に見る1970年代の美術——Do it! わたしの日常が美術になる」展（2022/10/8～2022/11/7）に寄せられた反響を思い出しました。この企画展は1970年代の芸術表現において、印刷物を通して表現された複数性がテーマで、展覧会の企画者は私を含め3名ですが、一緒に企画した人たちは80年代生まれで、私はギリギリ70年代生まれ。当時を直接知らない立場から展覧会を構成しています。そうなった時に、「違うよ、これは」とか「本当はこうだった」と、当然議論になりますよね。声をくださったのは当時をよく知る当事者だったのですが、「本当はこういう経緯だから、この解説はこうじゃなくてこういうふうに書いてほしい」というご指摘をいただきました。最近ではコレクティブという言葉が聞かれることもあると思いますが、実は70年代に学生運動を経験した世代の作家が、複数人でグループを作りなが

ら作家の署名性が特権化されるような作品の形式を避け、表現をめぐる新たな組織論を模索していました。そういう流れが後に「ねお展」のような展示の形式にもつながっていくと思うんですけど、プロセスを見せたり、個人名を出さない表現を作品として提示する最初の流れを展示では紹介していました。それに対して、「このグループには中心がなかったはずなので、解説にある誰々と誰が中心という表記は避けるべきではないか」という指摘をいただきました。中心をもたない集団のありようについての指摘は、展覧会の趣旨に共感してのコメントでもあり、本当に嬉しく思いました。

この展示が無料で開催できたということも後押しになったと思いますが、クレームという形ではなく、ご意見としていただけました。直接反応する方の数は少なかったとしても、発言したいと思う人が参加できる、ひとつのきっかけに展覧会になったことを実感できる出来事でした。

中原 お金取ってしまったら、正解を用意しないといけないとも限らないですよね。特にいまの若い子やインターネット上では、お金を払ってコメントするという場合が多々あると思います。だから、お金を払って展示行っ



て、内容が間違っていたら「こうじゃないよ、こうだよ」とツッコミを入れたり、何らか鑑賞者が語れる空間に参加することもあり得るんじゃないでしょうかね。

館長 たしかにそうですね。

金山 「ねお展」に対する感想も人それぞれでしょう。自分のなかだけで留めて自己完結する人もいれば、どう思ったかを何かしら人に話したり、SNS上に書いたり、何らかのコミュニケーション行為が行われていると思うんです。とりあえず展示してみて、何が起るか委ねるみたいなのも、あり得る気がします。

伊村 この展示ではないですが、ディスコミュニケーションが起きるケースもあります。一方的に否定されて終わるような、たとえクレームになったとしても、その方にとって何か考えるきっかけになる方が何もないより良いのかもしれない。

館長 そうですね。博物館でも展示物に対する解説について、「これは違うんじゃないか」という指摘を受けることは珍しくはありません。おそらくそれは、展示物に対して来場者が自分の記憶や自分のストーリーなど、何らかの形で展示物と自分を結びつけた結果の作用なので、それは展示と来場者の対話として受け止めるべきではないかと思うんですよ。

県立の博物館は公の場所なのでご意見もあるかと思いますが、いままさに「ねお展」を開催しているスペースは、マイミュージアムギャラリーという、まさに「自分

の」というところを担保している空間としています。

そういう場所が公のミュージアムの一角にあることが、先ほどの誤解や区別を紛らわしくしているところも、たしかにあるかとは思いますが、やはりこの博物館の意図としては、オフィシャルなミュージアムもあり、マイミュージアムもあります。ミュージアムというのはそういうものだということなのかもしれないというふうに、いま、お話を聞いていて思いました。

金山 冒頭で伊村さんがおっしゃっていたように、マイミュージアムって本当はすごく大事な機能なんじゃないでしょうか。私もこれまではコレクターの人が展示する場所というイメージがマイミュージアムにあったんですけど、本来は違うんですね。パブリックでありながらも個人のいろんなものを許容しながら、市民間でコミュニケーションを育んでいく場とも考えられます。そういう場所をパブリックとしての博物館がもっているっていうことが、実は重要なことなのではないかと、やっと気づいた気がします。企画している時はあまりその認識はありませんでしたから。

展示の権力性

伊村 会場がプライベートであれ、パブリックなスペースであれ、展示には「権力」があると思います。先ほど中原さんがいわれたことだと思うんですけど、展示という行為が分類をしたり、代弁するみたいな機能を発動してしまうんです。展示という枠組みには優れたコレクションを紹介したり個人を顕彰するような歴史的文脈があるので、そういう刷り込みをどう外していけるのか…。

中原 そこはすごく大事だと思います。私が運営するよだか総研では展示だけではなく、福祉に近いようなことやシンクタンク事業をやっています。そうした活動のなかで、そもそも記録や歴史どころじゃなく、口外自体が難しい出来事に出合う。たとえば、ある学校内で自殺未遂が起きたら土足で入っていくわけにはいかない。「なんでこんなにしんどそうなのかな」みたいなことを考えたり、向こうが話してくれるまで黙って待つ必要があるんです。

展示は、その真逆なんですよ。待つどころか唐突に「根

尾とはアジールだ」といってしまう。そうすると、「えっ、違うんだけど」と当事者が戸惑っているあいだに、展示が進んで、当事者が無力化されるみたいな目にあってしまう。同時に、こんなすごい人たちが展示しているのに、自分が展示できるわけがないんだって思わせてしまった。「ねお展」を企画した時も、少なからずそういうことが起きてしまったなっていう感覚はあるんですが、でも本当はプロの作家の人たちでさえ、最初から展示ができたわけじゃなくて、とりあえず作ってみて置いたとか、ありますよね。とりあえず、おじちゃんでも言いたいことがあるなら、「いっててもいいよ。そんなに怖くないよ」っていうのを伝えたい。根尾で私たちが取り組む活動のなかで、どうやって人を勇気づけ、力づけるのか、よく考えています。私だけではなく、よだか総研の別の理事が毎回、「エンパワーメント」みたいなこというんですよ。「いいたいことはいったらいい、やったらいのに」って思ってるんですけど、そうもならないところが難しい。展示すればするほど、みんな黙っちゃうみたいなことが起きます。自分がわーって展示するとみんなが黙っちゃうから、聞くための展示やワークショップ、何か引き出すためのアプローチを考えているアーティストが最近はいると思うんです。

金山 特にガラスケースのなかに、日常のなかにあるものを入れてしまうと、ちょっとキラキラした感じというか、格調高くというか、だいぶ印象変わってしまうということを、私も感じました。展示されることで、汚い庭先にあるものがきれいなオブジェに見えてしまう。ただそのこと自体は悪いわけでもなく、博物館がもつ特有のコードがうまく機能する場合もあると思います。

中原 そうでしょうね。うちの子どもは根尾の子どもなんですけれど、普段だったら風景に溶け込んでいて見向きもしないのだけど、「ねお展」にくると、みるんですよ。その力って展示や博物館にしかないですよ。普段だっですぐそばにあるんだから「みればいいじゃん!」と思うんですけど、なぜかこの空間だと一回立ち止まってみるんです。多分これがコードですよ。いつも住んでいるところにあるのに、わざわざ博物館に来て止まってみると理解できる。それはとても面白かったです。

「観ること」による教育的役割

伊村 あまり大上段に構えた言い方はしたくないんですが、グローバリズム以後のミュージアムのあり方を模索していた90年代の頃を思い出しました。いまでいうところの多様性の議論につながっていく話なのですが、ミュージアムは民族や人種、生物としての多様性に対して、異なる視点を提供するだけでなく、同じ立場に立って観る場としての役割を果たせるのではないかと。いま、それは理念ではなく、本当に必要な状況になっていると感じます。分断が深刻になっているとか、そういう状況とも関係しているかもしれません。

何ともいえない矛盾ではあるんですけど、60、70年代に、社会的な意味でのシェルターはミュージアムではなく「路上」にありましたが、いまはミュージアムがシェルターとして機能しなければまずいのではないのでしょうか。だから、アジールと言っている場所も、実はミュージアムがアジールかもしれませんよね。アジールは根尾にもあるかもしれないし、かつては権威的だと思われた場所もそうなった方がいいかもしれないし、いろんなところにあるほうがよいのかもしれない。何かそういった配置換えみたいなことがとても必要になってきているような気がします。

金山 博物館がアジールになったらよくなって思っちゃいました。

伊村 観るという行為を通してかもしれないですけど、そこまでいけたらよいですね。

金山 博物館は、基本的に「もの」があって、それをみていく力を養う場でもあるから、私たちも展示したものをじっとみてしまう。以前、クワクポリョウタ先生と学生でこちらの岐阜県博物館に訪れた時に、学生たちがジオラマをみて大変感動していたんです。展示台の前に立って1時間くらい動かない。関ヶ原の戦いの展示に関しては、裏側の仕掛けまでみせてもらうほど惚れ込んでいました。

普段、PCの画面でものをみて、ものを見ずにネットで調べて分かった気になってしまっていますが、「何かをじっとみて、そこかみえてくるものが何かを考えていく力と



ねお展の展示物 (根尾の神社) に見入る来場者

いうのが圧倒的に落ちているね」といった話をその時した記憶があります。じっとみるという行為、それは多分自然にそうになっているんだと思うんです。自分の地域を再び見直し考える機会は「ものを観るということの力」を育む博物館だから得られたと思います。自分が住んでいる現実を違う形で観ていく機会になるのかもしれないと思いました。

「ねお展」で能狂言の展示をじっとみていた人が「うちにもこういう消えそうな祭りがあるんですよ」って自分の地域の祭りのことを一生懸命思い出して語り始めて。展示を観て、自分のなかで何かの記憶を想起した結果だと思います。その地域をじっくり観るということが、普段そのようなことをしない一般の人たちにとっても大事なことのようには思います。

中原 観るということに夢があるなと思いつつ、どちらに転がるかわからない恐怖も感じます。ものだけを観て、これがどういうものか、自分の地域や自分におけるそのものの意味づけをを探りながら展示を観る姿勢もある一方で、書かれたものや完成された歴史のなかに自分を「確認」しにいくっていうものもある。典型的には城址とか城とかを訪れた時、自分の先祖はどここのなんとか藩の

誰々に繋がっていたかもしれないと思って行って、その確認のプロセスとしてみるという行為。僕は、そういうことに関して、切実に怖さを感じているんです。どうやったら「確認」ではない見方ができるのか。ちょっとまだ分からないですが、確認の方が安心するんですかね。

金山 事前に知識があったり、詳しい人は、どうしても自分の知識とまず比較してどうだったか考えますよね。それで違っていれば、「それは違うじゃないか」といつてくる。そういう人は本を読んでもそうなるし、何を見てもそうなる気はするんですよ。ただ、そういうタイプの人もいれば、自分事としてその地域との関わりでみる人もいて、いろんな人たちがいるとは思います。

中原 ふと、ノーベル文学賞を受賞したスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』という本のことを思い出しました。彼女は聞き取りをして書いていて、第二次世界大戦に従軍した女性のいろんな話が出てくる。パンツが男もので嫌だったとか、その人から見た歴史が話されるのだけど、それを原稿として書いて、こういう感じでいこうと思いますって確認したら、全部バツがついて戻ってきた。ロシア軍はこの時こうい

う状態で、ここでなんとか攻撃が始まって、この時はこうなっているから、これが「正しい歴史」だと。テープに録音された物語は全部否定され、その人本人が「正しい歴史」を突き返してくるっていう過程がいっぱい書かれていたと思います。なんか重力みたいなのを感じますよね。

自分の歴史を、あるものを媒介させるとき、例えば根尾に何かものがあるって、これは自分にとって意味があっても、いってはいけないという重力を感じます。

展示というエンパワメント

金山 私も話を聞く時に、「みんなは何ていっているのか分からないし」とか「ほかの人にいわないでね」みたいな前置きは結構もうなんですけど、「いいよ、いいよ、おばさんがどう思ってるかでいいんだからね」といって、オーラルヒストリーみたいな形でとにかく聞いていくことが絶対必要だと思っています。特に女性は声に出しにくいとか、目立っちゃいけないとか、根尾のなかでは絶対目立ちたくないとか、みんないます。「目立っちゃいけないから、いわないでね」「いいよ、いわない」といいながら、なかに入っていくわけです。でもやっぱり口にするという行為は、本当にいいなくなったら絶対いわないはずで、なにか知ってもらいたいとか、自分はこう思っているというのがある。それを安心していえる状況を担保するというのが一番重要で、かつその関係性を築いていくことができるから言ってもらえるんです。フィールドワークに行くと割と簡単にものをくれるんですが、そこまで話してくれる関係を作るのにはそれなりの時間がかかります。いまだから「いいよいいよ」と話してくれますけど、3年前だったら絶対言わないみたいな人もいたりする。この人だから話しても害はないとか、大丈夫かなとか、逆に聞いてもらいたいとか。そのうちに向こうから電話がかかってきて「こういうのが見つかったから取りに来て」とか言われるようになる。

「ねお展」でもこういうものを出して大丈夫か分からないとか、確信が取れないものを出して大丈夫かなということは、例えば、公民館の館長に相談すると「出したほうがいい」と。「出さなかったら（歴史）が消えるから出して」といわれて「じゃあ、出します」という感じで。本当かどうかということより、出すことの方が大事

だと思うとおっしゃる方も多いので、そこは結構勇気もって出したものもあったりします。もっとも面白いと思ったからという理由もありますが、このタイミングで出せなかったらもう二度と出せないなというものは実はあるので。出すと決めた時に、「こんなの出すの」とか「大丈夫なの」とかいわれた場合、「こういう理由だから出したらいいと思うんだけど」と相手の方に説明して納得してもらいます。やっぱりそういった過程で、私たち部外者が地域のなかで信頼関係を築き、納得してもらって出せるかっていうところの上で成立しているとは思っていて、それがなかったらもっと怖くてできないってところはありますよね。

伊村 他人がもっているものに関わるというのは時間がかかることでもあると思うんです。時間がかかるけれど、どうやって継続していくかというところが重要なことかもしれない。それから、人を変えるのはすごく難しいことで、新しい価値観を受け入れてもらうのもとても難しいことですよ。

中原 「信頼関係」っていっているのと、その人が変わるっていうのは、ほとんど同じことだと思いますよ。僕からすると。信頼関係があるから出してくれたんだって思われている、それも事実だと思うんですけど、僕からするとある側面、その人はエンパワーされて、「出してもいいんだ」と思えたとも見える。

金山 それもあるかもしれないですね。

中原 だから、それはすごいなって思うんです。

伊村 大きな変化ですよ。

館長 今回の企画が展覧会になって、その影響が当事者というか、根尾の人にどう与えるかという話が出ましたが、展覧会に至るまでのプロセスで、例えば金山先生とか、IAMASの関係者が地元の人と接触して、さきほどこいわれたようエンパワメントを与えたりそういう作用が、展覧会をすることをきっかけに、その地域にもしそういう作用をしているのであれば、それは展覧会の効果

であるといっけよいのではないかと思いますし、そういう展覧会を企画していくことが、地域との関わりをより深めていける。これは公の博物館にとっても、大きな効果として認められるのではないかと思います。

中原 それを認めていただけるととてもありがたい。ひとりの生活者が語ることに価値を見出してもらえている。文化行政上の価値を見出すのは相当難しいと思います。でも、それが認めてもらえたら、ものすごくいい。すごい！

館長 今回は、そういう意味で新しい試みで、展示の対象となる当事者がいまいる地域社会に入っていって、展示するものについてコミュニケーションをして、こういう形で表現していくという一連のものとか、地域と関わっていく、あるいは博物館の機能が地域に作用していくというところを、これからどう捉えていくか、どう形にしていけるかが大変重要なところだと思います。博物館が地域と関わっていく時に、具体的にどうやって形にできるのかということが課題になってくるのかなと。

金山 今回、集落として取り上げた越波^{オッパ}の区長さんにチラシを渡して「機会があったら、皆さんに配ってね」と頼んだら、「住民に配った以上、区長だからみにきた」といって、この間ひとりであらしてくださったんです。自分たちの集落の越波が、展示で取り上げられてることも、そもそも博物館にきたこと自体が初めてだったそうで。なんか違うイメージをもって帰られたような感じで「次、こういうのやったらどうかな」みたいな話をされていました。エンパワーというか、ちょっとやる気を与えたといったら失礼ですけど。

伊村 自分に関係があるって思えたってことですよ。

中原 そういうことですよ、すごいと思う。

伊村 すごいことですよ。博物館側の立場から市民に向けて、そういう関係がうまく機能することは、実はなかなか難しい。今までの関係性を変えるきっかけみたいなものがうまく見つかると、自分に関係があるって思う

人が意外な形で関わってくれるようになる。それが第1歩かもしれませんね。

金山 あそこがやっているんだから、うちだってできるだろうとかね。

伊村 そうです。

金山 「自分のおじさんが根尾に住んでいて、水源があるって聞いたんですけど、どれですか」という人がいて、「これです」と紹介したら、食いつくようにみて、「1回行った方がいいですよ」といったら、「行きます！」と。そういった繋がりもあって、なかなか面白かったです。IAMASでやったらこんなに多くの来場者はありませんし、週末には私たちがアクセスできないタイプの人たちが来てくださることも県立博物館のすごいところ。

伊村 同じものを見る時のマインドセットを変えるってことが本当に必要です。制度設計というのは設計して終わりというより、組み替えていかないと変わっていかないんじゃないかと最近感じています。

金山 博物館マニアとか、なんかそういう人じゃなくて、本当にたまたま来た家族連れとか、何かで知ってきた人とか、いろんな人がいますが、そういう人たちがひとりでも「おもしろい」とか何かを感じてくれれば、そんなに嬉しいことはないです。

ということで、皆様からたくさん貴重なご意見がでてよかったと思います。最後に、次に展示をするなら、こんなことができればよいのではないかといったご意見があれば、是非お聞かせいただければと思います。

ポストねお展

中原 特にこの展示、対談では、歴史における権力性、歴史記述の権力性みたいなものに注意があって、それが大事なんだっていう共通認識があったから、コ・クリエーションとして展示を出発することができた。

でも、やはり先ほどいったように、多くの人々が、待っていれば出してくれるとか、待っていれば自分の歴史記述をしてくれるみたいなことはないので、力づけや介入

がどうしても必要です。それはいつも思っていることなので、これからも地味にそういうことやり続けていくと思います。

伊村 この「ねお展」の次があるとしたらということですよ。もう既に話してしまったところもあるような気がするんですけど、もし同じ場所でやるのであれば、博物館にある資料を使う。自分たちが持ち込んだものだけではなく、既にある資料との関係性をどう見せていくか、ぜひ見てみたい。これまで博物館の文脈でみせてきたものの見え方が変わると思います。さらにいえば、いまはひとつの企画展として完結しているんですが、ほかのコレクションにどう踏み込んでいくかを視野に入れるとさらに広がり生まれるのではないのでしょうか。

個人的には同時代を語ることが本当に重要だと思います。同時代を語るための資料を考えると、その資料のあり方というのがマイコレクションでもよいということですが、そこをつながりや見え方を作っていく必要があると思います。コレクションという言葉はとてもよい言葉なんですけど、両義性があるって、さっきお話ししたように、展示に繋がるような、誇示していく側面もあるんですけど、個人のコレクションがいくつあってもよいんだというような見え方になっていく必要があるって、そこにどう役割を果たせるのかということに期待しています。

金山 今回も個人のコレクションが若干入っているんですけど、もう少しなにか集合体として見せても良いのかなと思うことあったので、ぜひ「ポストねお展」の企画に組み込みたいと思います。

編注

- 1 根尾は、岐阜県本巣郡にあった根尾村で、2004年に本巣郡の4町村が合併して本巣市となった。現在も旧根尾村の地域は根尾と呼ばれている。
- 2 2022年4月に「博物館法の一部を改正する法律」が成立し、約70年ぶりとなる博物館法が改正された。博物館に求められる役割が多様化・高度化される状況に基づき、法律の目的や博物館の事業、博物館の登録の要件等を見直している。

館長 マイミュージアムギャラリーで新しいこれからの博物館の展示会の方向性、展示構成の多様性を示唆するようなことをやっていただき、嬉しく思います。今後さらに、展示会を共催するということもあるかもしれませんし、この展示会を経て当館職員が今後の取り組みにどう生かしていくかということが大切だと思います。

記録の展示というのは、人の記憶を刺激し、いろんな作用が起きます。この展示会も来場者数や評価など、記録は生まれますが、この展示会をみた人だけでなく、展示会企画に参加した人、展示を出品した人も含め、展示会が記憶として残っていくと思います。そのプロセスは非常に、一般の人と一緒に展示を企画する時には大事だということを改めて思いました。これから博物館が誰を対象にしていくのか、これからのあり方を念頭に置きながら館運営を進めていきたいと思ひますし、IAMASの今回の展示会は、大いに参考になると思いますので、改めて本展示会を博物館の転換期に迎えられてよかったと思います。

金山 皆さま、今日は色々ご意見やご感想などありがとうございます。開催するまで、本当にいっぱいいいで、なかなか考えることすらできない状態で、落ち着いて考えることもなかったんですけど、ようやく博物館で展示する意味というのを自分たちなりに整理し考えていく段階になってきました。それを踏まえて、新しい可能性も考えてみたいという気持ちにもなってきました。会期は残り2週間ほどとなりましたが、もう少し観にいらっしゃってる方たちを観察しつつ、次の展開を考えていければいいかと思っておりますので、引き続きよろしくお願いします！